

天正地震下層の出土遺物 ——清洲城下町遺跡90D区出土遺物の検討——

鈴木 正 貴

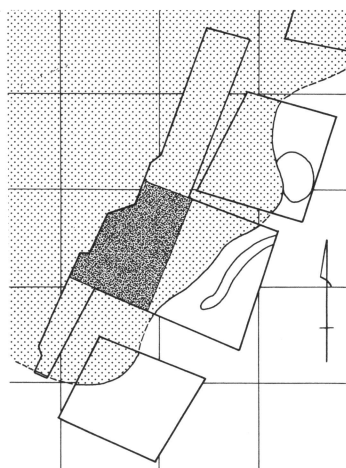
1. はじめに

愛知県西春日井郡に所在する清洲城下町遺跡は16世紀を中心とする全国屈指の城館遺跡であり、従来三重の堀を掘削した1586年を境に前期と後期に分けて遺構を論じていた。しかし、既に拙稿⁽¹⁾で示したように全ての画期が1586年に位置付けられるか否かは疑問があり、前期の遺物群の様相・後期の遺物群の様相を改めて検証し直す必要がある。今年度調査した90D区⁽²⁾では、1586年に発生した天正地震によって吹き上げられた砂を多量に確認し、この砂に覆われた堆積層から多数の遺物が出土している。加えて、さらに下層に当たる旧流路の粘土層からは「永正五年」の卒塔婆が出土し、年代を知る上で良好な資料となっている。この90D区⁽²⁾の天正地震の噴砂下層出土遺物を紹介することにより、1586年以前の遺物の様相を少しでも明らかにしていきたい。なお、今回は瀬戸・美濃窯産の陶磁器を中心とした陶磁器・土器類を対象とし、木製品・石製品などは別稿に委ねたい。

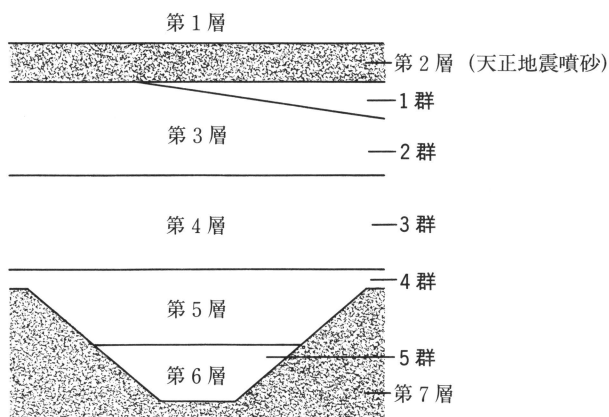
2. 天正地震の噴砂と層位

今回取り上げる調査区90D区は、五条川左岸の現堤防下に位置し、直ぐ南には中堀が存在する地点である。調査区全体が旧五条川の中に入ってしまう90D区の層位を上位から説明していくと、

第1層 黄褐色シルト層などで、1794年の瀬替え時の盛土を中心とする清須城廃城以降の



第1図 90D区遺構図(S=1/1500)
(薄いアミは旧流路、濃いアミは遺物の取上げ範囲をそれぞれ示す)



第2図 90D区層位模式図

盛土と考えられる。層厚は2 mを越える。

第2層 黄白色砂層、地震による噴砂の堆積で、噴出量は約170m³にのぼる。

第3層 灰色粘土層でブロック状を呈する。第4層と合わせて層厚は約1 mである。

第4層 青灰色粘土層、第3層と第4層が五条川によって堆積した土層である。

第5層 黒灰色粘土層で、植物遺体などを含有する。旧流路が塞ぎ止められ澱んでいた状況を示している。ここから「永正五年」の卒塔婆が出土した。最大0.5mの厚さを持つ。

第6層 青灰色粘土および砂層で、旧流路最下層に相当する。

第7層 灰色砂層、本遺跡の基盤層になる沖積上部砂層である。

となる。(第2図)。ここで問題となるのは第2層の砂層である。この砂層は淘汰の良い砂で断面に第7層の砂層から吹き上げた地割れ跡が認められることから、地震に起因する砂層である。また、第2層の砂層を貫いて吹き上げる砂(地割れ跡)が認められ、新旧2回の地震が発生していることが分かる。噴砂現象を起こす地震はこれまでのところ1586年の天正地震と1891年の濃尾地震などが考えられている⁽³⁾。下層に1508年の紀年銘資料があり、これよりも前には遡らないことから、第2層の噴砂を天正地震、それを貫く砂を濃尾地震にそれぞれ起源を求めたい。

ここで取り上げる資料は、第2層以下から出土したもので確実に1586年以前の年代が与えられるものである。資料の出土層位を上位から順に紹介する。

1群 第2層・第3層間の炭化物と焼土を含む堆積からの出土遺物。第3層を掘り込む遺構埋土と考えられるがプランは判明していない。

2群 第3層(灰色粘土層)出土遺物。

3群 第4層(青灰色粘土層)出土遺物。

4群 第5層(黒灰色粘土層)出土遺物。

5群 第6層(青灰色粘土および砂層)出土遺物。

なお、1586年以前の出土遺物の様相を明らかにすることを本稿の目的とするため、用いる資料は天正地震の噴砂に確実に覆われている部分の約200m²の範囲(第1図)から出土した資料に限定する。

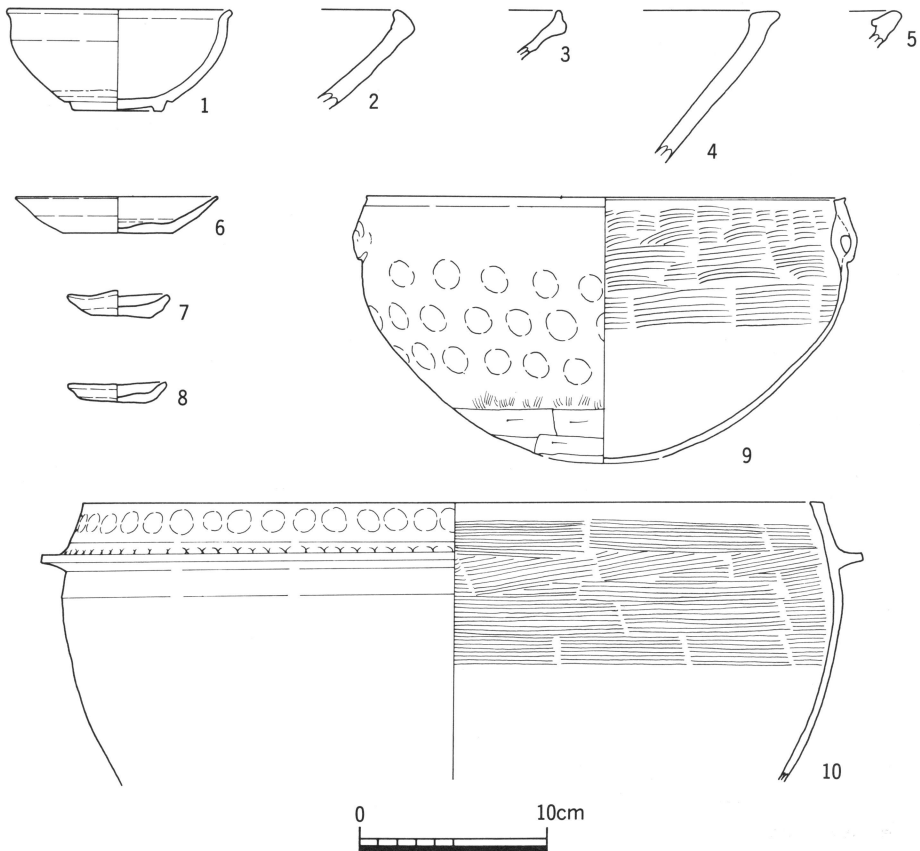
3. 出土資料の紹介⁽⁴⁾

1群(第3図) 椀は天目茶椀と灰釉丸椀がある。天目茶椀は口縁部が括れ、化粧掛けを施した輪高台のもので窖窯後期第4段階に比定される(1)。皿は灰釉端反皿が多く灰釉丸皿も若干ある。播鉢は口縁部が上方にやや伸びたもの(2)、口縁部が断面三角形になるもの(3)、口縁端部が内側に張り出すもの(4)、口縁端部が内側に折り返される大窯Ⅲ期に比定されるもの(5)がある。土師器にはロクロ成形の皿(6)、非ロクロ成形の皿

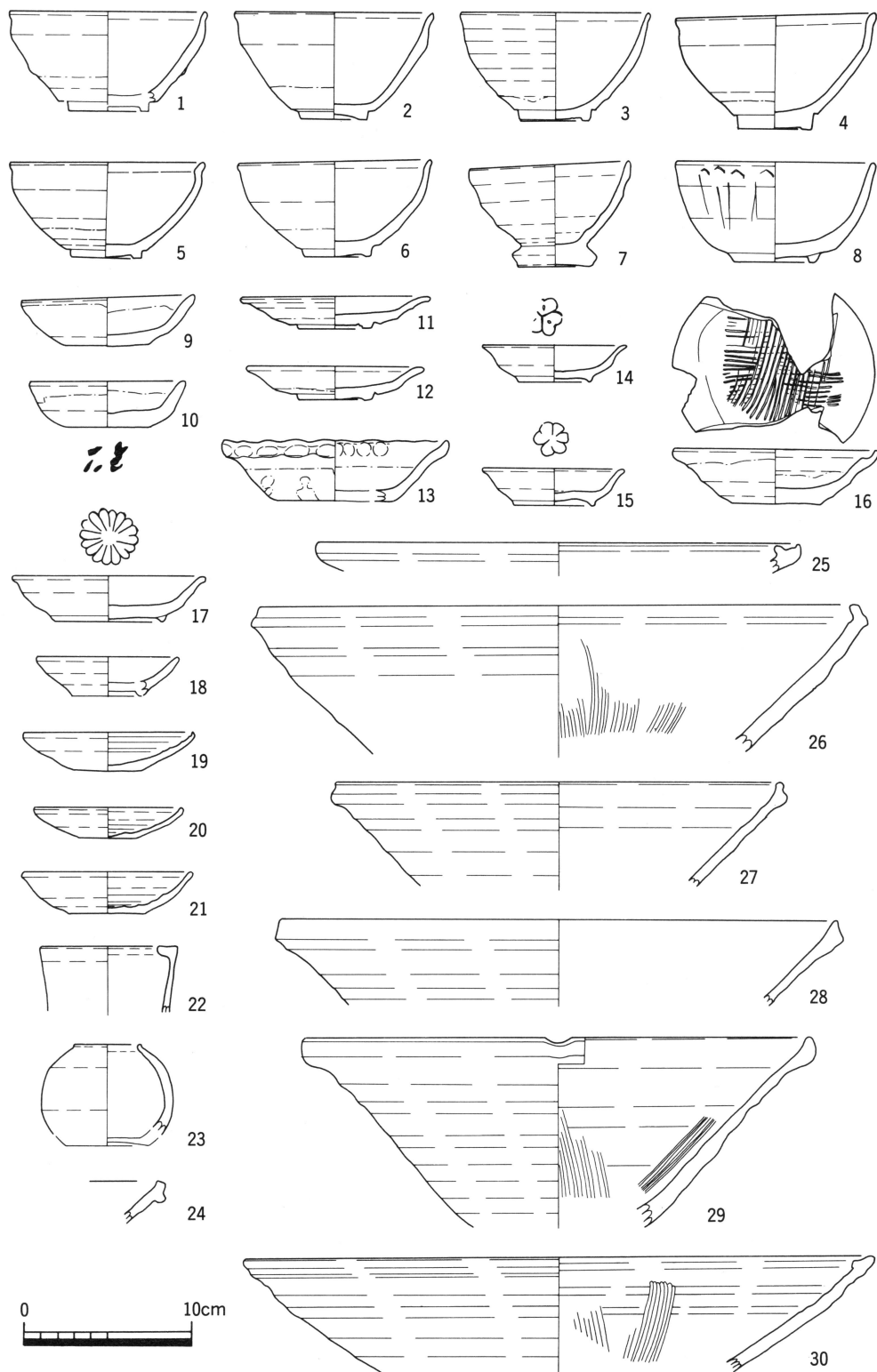
(7、8)、内耳鍋(9)、羽釜(10)がある。内耳鍋は口縁部が内湾し、内面上方にやや細かめのハケ目が施される。この他に、瓦の小破片などが若干存在する。

2群(第4・5図) 碗は天目茶碗・灰釉丸碗・台付碗・鉄釉丸碗・灰釉平碗がある。天目茶碗は外面下半部に錆釉を掛けて化粧掛けを施したものが大半を占める。口縁部が短く括れる高台幅が広い輪高台のもので窖窯後期第4段階に比定されるA類(4～6)・口縁部が直立し口唇部が玉縁状になる高台幅がやや狭い輪高台のもので大窯Ⅰ期に属するB類(3)・口縁部が直立してやや外反する内反高台のもので大窯Ⅱ期に属するC類(2)、外面下半部が露胎となり、口縁部が大きく括れる輪高台の大窯Ⅲ期に比定されるD類(1)の4類に分けられる。台付碗は底部に回転糸切り痕が残るもの(7)である。灰釉丸碗は外面に文様を施さない丸碗と、剣先状の蓮弁文を配したもの(8)、口縁部に近いところに縦線の入った碗の3者があり、いずれも大窯Ⅰ期に属するものである。

皿は灰釉縁釉皿・灰釉端反皿・灰釉腰折皿・重圈皿が主要なもので、鉄釉腰折皿(11)・灰釉丸皿(18)・灰釉卸皿(16)などが少量存在する。灰釉縁釉皿は口縁部が内湾する



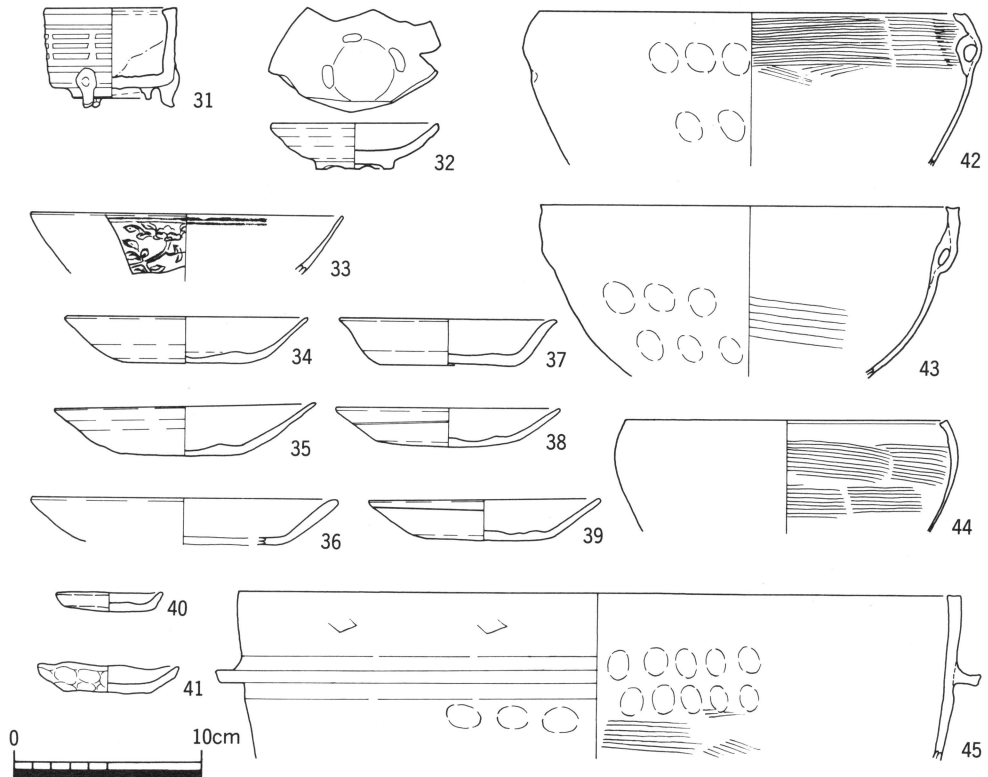
第3図 Ⅰ群(第2層と第3層の間の出土遺物)



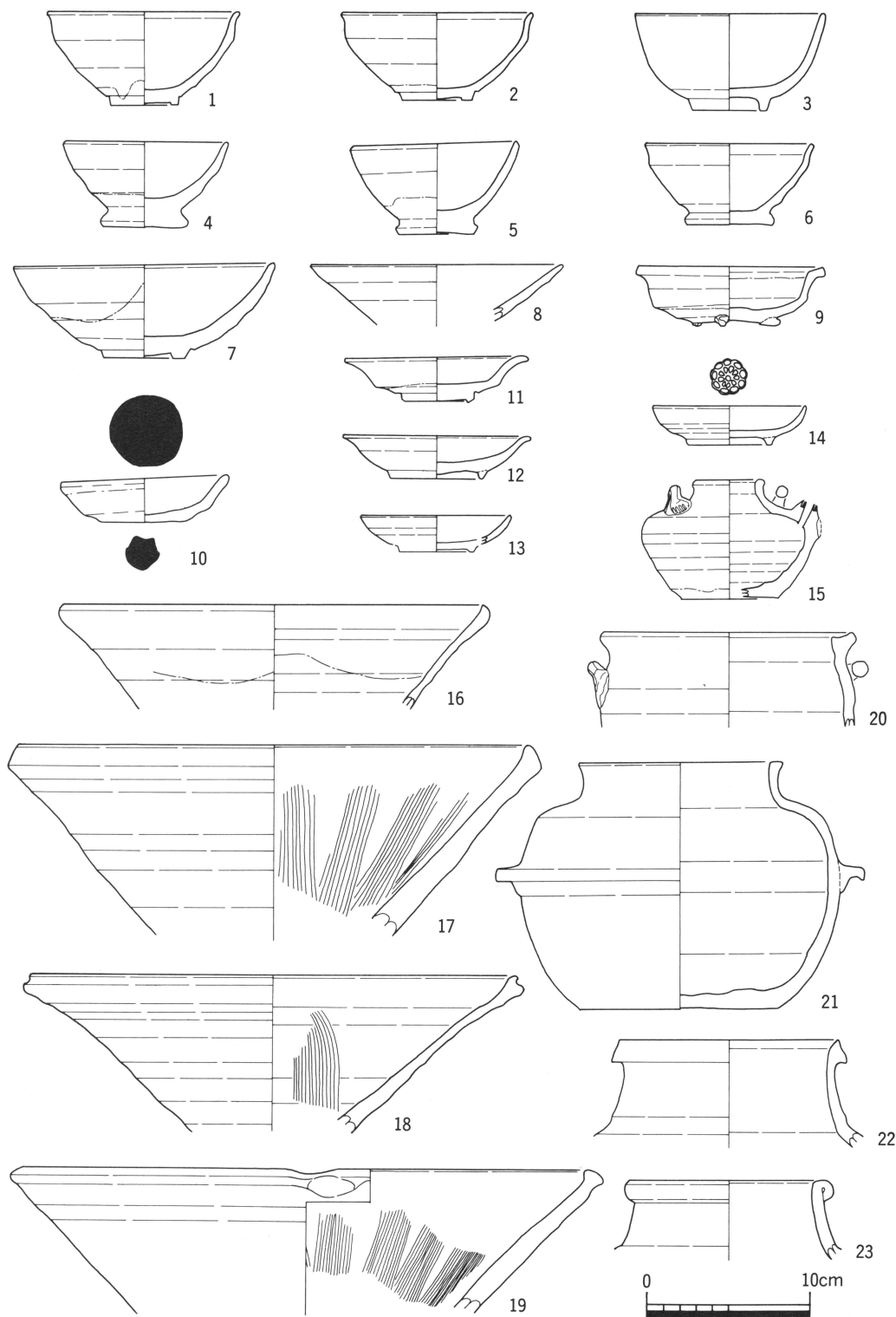
第4図 2群(第3層出土遺物)(1)

ものと外反するものがあり、底部に墨書を記したもの（10）がある。高台を削り出して作り、外面下半部に釉を掛けずに折れて立ち上がる灰釉腰折皿（12）は窖窯後期第4段階に比定される。灰釉端反皿は大小様々な大きさがあり、見込み部に印花を持つもの（14・15・17）と持たないものと分かれる。印花紋の種類も幾つかあり、いずれも大窯Ⅰ期に属するものである。重圈皿は圈線が螺旋状をなすものと同心円をなすものがある。圈線が螺旋状をなす重圈皿は口縁端部がそのまま開くA類（20）と、口縁端部が大きく内湾するB類（19）がある。前者を大窯Ⅰ期、後者を窖窯後期第4段階にそれぞれ比定する。同心円の圈線をもつ重圈皿C類（21）は大窯Ⅱ期に属すると考えられる。

擂鉢は口縁部の形態から7類に分類でき、口縁部の内側に突帯が巡るA類（25）、口縁部が上方にやや伸びるB類（26）、口縁部が断面三角形になり端部に凹線が走るC類（27）、口縁部が断面三角形状になるD類（28）、口縁部が玉縁状に丸くなるE類（29）、口縁端部が内側に折り返されるF類（30）、口縁部が縁帯を成すG類（24）がある。A類・B類は窖窯後期第4段階、C類・D類は大窯Ⅰ期、E類は大窯Ⅱ期、F類・G類は大窯Ⅲ期にそれぞれ比定できる。このほかに陶磁器類には、香炉（22）・鍋・茶入（23）・壺・青磁の香炉（31）・朝鮮王朝製白磁皿（32）・染付の碗（33）・瓦・瓦器・常滑窯の甕などがある。



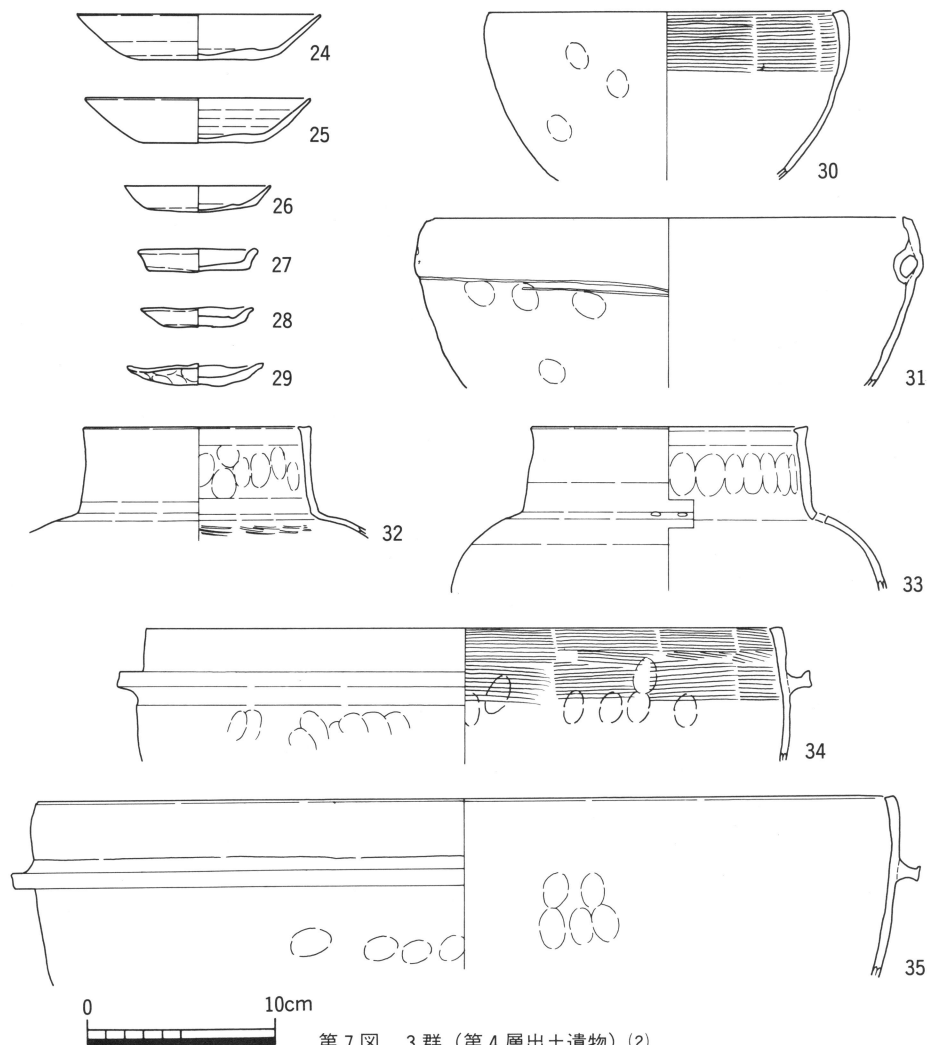
第5図 2群（第3層出土遺物）（2）



第6図 3群（第4層出土遺物）(I)

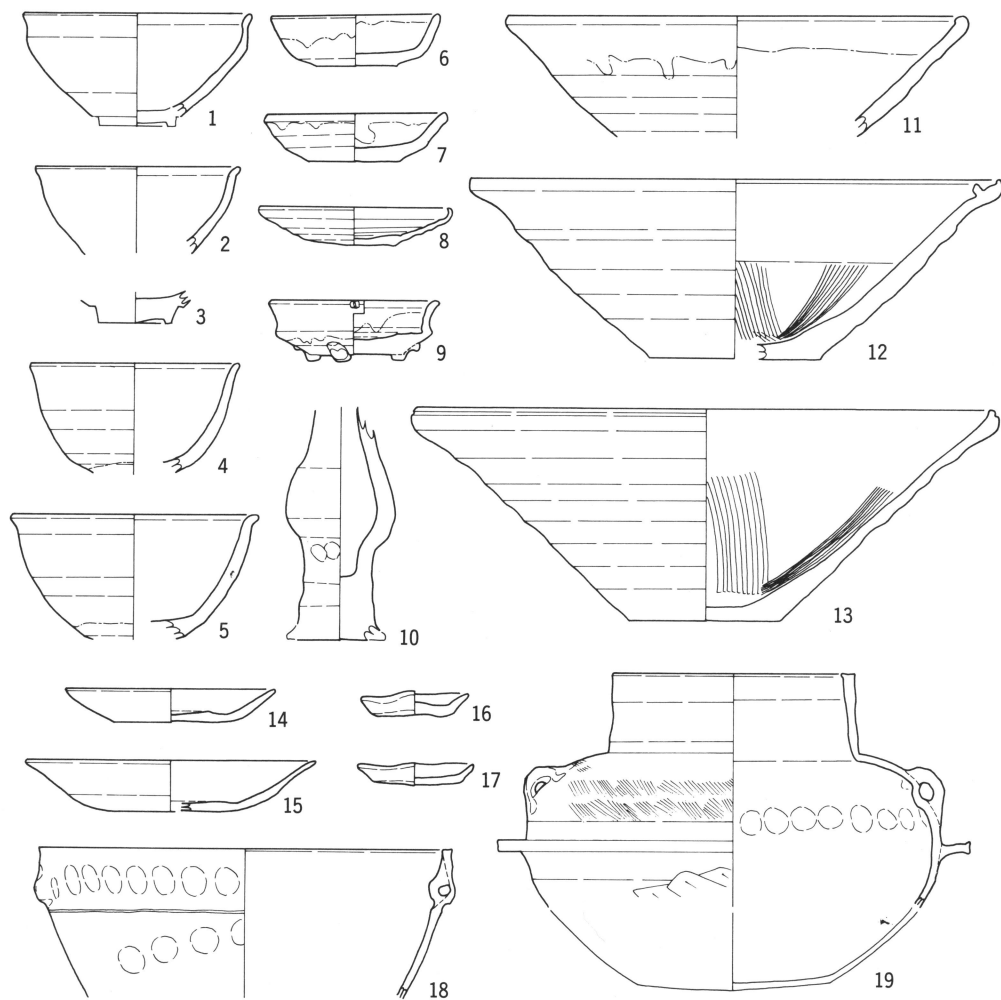
ロクロ成形の土師器皿は、体部が直線的に伸びるもの（34・35）、体部が直線的に伸びて外面に一条微かな沈線が巡るもの（38・39）、口縁端部が厚くなるもの（36）などがある。非ロクロ成形の皿は、体部に横ナデを施すもの（40）と、横ナデがないもの（41）がある。このうち、後者は、拙稿(5)で示した清洲城下町遺跡Ⅱ－４期に見られるナデのない土師器皿に比べ、外面に指押さえ跡が多く見られ、横ナデの代わりに指で押さえながら体部を作っている。内耳鍋は口縁部が内湾し、内面ハケ目が残る。法量に大小の２者がある（42～44）。この他に、羽釜（45）・茶釜型羽釜がある。

３群（第６・７図） 碗は天目茶碗・灰釉丸碗（３）・灰釉平碗（７）・台付碗・鉄釉平碗（８）がある。天目茶碗は２群のＡ類（１・２）・Ｂ類のみがあり、すべて外面下半部に錆釉を掛けて化粧掛けを施している。台付碗は底部に回転糸切り痕が残るもの（４～



6) で大窯Ⅰ期に相当する。皿は灰釉縁釉皿(10)・灰釉腰折皿(11)・灰釉端反皿(12)・重圈皿が主要なもので、鉄釉縁釉皿・灰釉卸皿・灰釉丸皿(13・14)が少量存在する。この灰釉丸皿は大窯Ⅰ期か大窯Ⅱ期かは特定できない。播鉢は、口縁部が断面三角形状でやや厚く外側に張り出す大窯Ⅱ期に比定されるもの(17)が若干存在する他は、2群での分類のB類(19)・C類(18)・D類に属するものが大半を占める。この他に、瀬戸美濃窯産の陶器は釜(21)、壺(22・23)などがある。

ロクロ成形の土師器皿は、体部が直線的に伸びるもの(24・25)、法量の小さいもの(26)がある。非ロクロ成形の皿は、2群と同様、体部に横ナデを施すもの(27・28)と、横ナデがないもの(29)がある。鍋類は内耳鍋(30・31)・茶釜型羽釜(32・33)・羽釜(34・35)がある。口縁部が内湾する内耳鍋は法量的に大小の2者があり、体部上方に沈線が

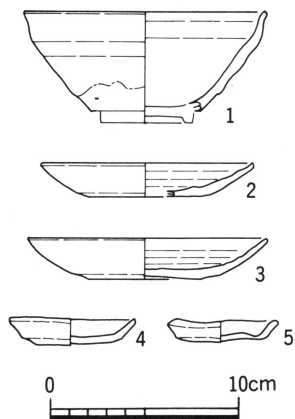


第8図 4群(第5層出土遺物)

巡るもの (31) がある。

3 群の資料の中で 2 群の資料との接合が可能である遺物も幾つか存在し、第 3 層と第 4 層の成因は共に流路の堆積であることから、2 群と 3 群を明確に区分することは難しいといえる。しかし、後述するように 2 群の方が 3 群より新しい遺物を含有することは、指摘しておきたい。

4 群 (第 8 図) 碗は天目茶碗・灰釉丸碗 (4) がある。天目茶碗は 2 群の A 類 (1・3)・B 類 (2) のみ存在する。皿は灰釉縁釉皿 (6・7) と 2 群の B 類の重圈皿 (8) がある。播鉢は、2 群での分類の A 類 (12)・B 類・C 類 (13)



第 9 図 5 群 (第 6 層出土遺物)

・D 類に属するものがある。その他に、鉄釉平鉢・灰釉平鉢 (11)・香炉 (9)・花瓶 (10) があり、すべて窖窯後期第 4 段階に所属するものである。土師器皿は、ロクロ成形で体部が直線的に伸びるもの (14・15) と非ロクロ成形で体部に横ナデを施すもの (16・17) がある。また、土師器鍋類は口縁部が直立して体部上方に沈線が巡る内耳鍋 (18) と茶釜型羽釜 (19) がある。

5 群 (第 9 図) 瀬戸美濃窯産の陶器は、2 群の A 類の天目茶碗 (1)・窖窯後期第 4 段階に属する鉄釉平鉢・播鉢の底部などが少量存在する。土師器はロクロ成形の皿 (2・3) と横ナデを施す非ロクロ成形の皿 (4・5) がある。

4. 器種別組成と時期別組成

先に第 1 図で図示した範囲内の出土遺物を、層位ごとに器種別組成を算出したのが第 1 表である。また、瀬戸美濃窯産の陶器に限って、生産地の側から提示された編年を用いて層位ごとに時期別の組成を算出したのが第 2 表である。なお、ここにあげた数値はすべて接合前の破片数を求めている⁽⁶⁾。

1 群 瀬戸美濃窯産の陶器は大窯 I 期を主体とし、窖窯末期から大窯 III 期までの遺物が存在する。播鉢で最も新しい大窯 III 期が出土することは注目に値する。全体から見ると、土師器の皿が 5 割を占めている。

2 群 今回取り上げた資料の中では最も出土量が多い。瀬戸美濃窯産の陶器は窖窯後期第 4 段階と大窯 I 期が主体となり、大窯 III 期まで出土する。碗と播鉢で最新期の遺物が見られ、1 群と似たような傾向がある。

3 群 瀬戸美濃窯産の陶器は窖窯末期と大窯 I 期が主体となり、播鉢で大窯 II 期が少量出土する。なお、1 群から 3 群までの資料には瓦・瓦器の小片が含まれる。

4 群 全体から見ると、土師器皿の比率が増え、7 割以上を占める。瀬戸美濃窯産の陶

			1 群	2 群	3 群	4 群	5 群	合計
土 師 器	皿	ロ ク ロ 成 形	157	1169	440	436	167	2369
		非 ロ ク ロ 成 形	46	188	118	42	14	408
	鍋	内 耳 鍋	4	259	52	12	6	333
		羽 釜	2	11	3	0	0	16
		茶 釜 型 羽 釜	0	21	20	5	5	51
		不 明	33	663	132	42	21	891
	そ の 他		0	1	1	0	0	2
瀬戸・美濃 陶 器	碗	天 目 茶 碗	13	119	38	9	1	180
		そ の 他	7	65	29	4	0	105
	皿	灰 釉 皿	20	172	46	12	0	250
		重 圈 皿	0	86	10	3	0	99
		そ の 他	0	3	1	0	0	4
	鉢	播 鉢	30	251	82	16	3	382
		そ の 他	2	17	10	4	1	34
	そ の 他 不 明		16	148	102	26	5	297
常 滑			7	102	45	17	2	173
中 国 ・ 朝 鮮 王 朝 陶 磁 器			3	24	0	2	0	29
瓦 器			2	4	1	0	0	7
瓦			2	6	2	0	0	10
そ の 他			3	11	0	3	2	19
計			347	3320	1132	633	227	5659

第 1 表 器種別組成表

		窖 窯		大 窯						窖 窯		大 窯			
		後期 ～3段階	後期 4段階	I 期	II 期	III 期	不明			後期 ～3段階	後期 4段階	I 期	II 期	III 期	不明
1 群	碗	0	6	12	0	0	2	4 群	碗	3	5	4	0	0	1
	皿	0	0	12	2	0	6		皿	0	14	0	0	0	1
	播鉢	0	4	4	3	1	18		播鉢	0	5	2	0	0	9
	その他	0	2	0	0	0	16		その他	7	6	1	0	0	16
	計	0	12	28	5	1	42		計	10	30	7	0	0	27
2 群	碗	10	37	80	5	2	50	5 群	碗	0	1	0	0	0	0
	皿	0	88	90	9	0	74		皿	0	0	0	0	0	0
	播鉢	0	53	22	6	2	168		播鉢	0	0	0	0	0	3
	その他	0	38	3	1	0	123		その他	0	1	0	0	0	5
	計	10	216	195	21	4	415		計	0	2	0	0	0	8
3 群	碗	3	26	24	0	0	14	合計	碗	16	75	120	5	2	67
	皿	0	17	15	0	0	25		皿	0	119	117	11	0	106
	播鉢	0	10	8	2	0	62		播鉢	0	72	36	11	3	260
	その他	0	9	0	0	0	103		その他	7	56	4	1	0	263
	計	3	62	47	2	0	204		計	23	322	277	28	5	696

第 2 表 瀬戸・美濃陶器時期別破片数

器は窖窯後期第4段階が主体となり、大窯Ⅰ期が減少する。なお、大窯Ⅰ期の皿は見られない。土師器鍋は羽釜が見られなくなる。

5群 土師器皿の比率が8割と更に増え、窖窯後期第4段階の陶器が僅かにある。

全体を通してみると次ぎのようなことがいえる。なお、これらの指摘は調査地点特有の傾向を表す可能性があることを注意しなければならないことはいうまでもない。

1. 下層になるにつれて、土師器皿が増大する。
2. 土師器鍋類は、内耳鍋がどの群も一定量を占め、下層にいくほど羽釜が増え、茶釜型羽釜が減少する。
3. 陶器の碗・皿の比率はどの群もおおよそ1:1である。
4. 陶器の皿は、灰釉皿が多く、鉄釉皿はほとんど見られない。
5. いずれも常滑窯産の陶器は約3%、中国・朝鮮王朝陶磁器は約0.5%を占める。
6. 各群とも、最新期の遺物は播鉢（部分的には碗）が若干量存在し、主体はそれよりも古い段階の遺物が占める。

5. 問題点

(1) 年代観

今回の資料紹介で、大窯編年の年代観については次の2点が確認できた。第1点は、1586年には確実に大窯Ⅲ期は出現し、大窯Ⅴ期は存在しないこと。第2点は、1508年の資料に伴って大窯Ⅰ期の遺物が存在すること。である。これは従来の年代観に符合する結果となった。今回は、天正地震の噴砂上層の良好な資料が無く、1586年以降の遺物の状況は把握できなかった。また、噴砂下層の遺物は、大窯Ⅲ期の遺物が少量で主体が窖窯末期と大窯Ⅰ期となることから、1586年直前の状況を示しているとは考え難く、1586年前後に関わる遺物の状況については結果として若干焦点がぼやけてしまった感がある。

ここで年代観の分析法について若干触れたい。年代観を考察する資料として、①遺物そのものに記された年代・②年代が分かる遺物・資料と共伴する遺物群・③絶対年代の判明する層位の把握から見る方法がある。前2者は年号が記された時期や目的・遺物が投棄された時期を考慮しなければならず、遺物の上限・下限の確かな根拠とはならない。それに対し後者はこの点の曖昧さは少ない。地震、火山灰、ひいては落城時の焼土層や盛土層などを把握して分析する方法が、曖昧さを残さない年代観を構築する手段となるだろう。

(2) 時期別組成

各層位時期別組成を見ると、上層の遺物には大窯Ⅱ期・Ⅲ期と共に、窖窯後期第4段階以降のものが混入とは考えられないぐらい多量に出土するのに対し、下層の遺物には窖窯後期第4段階よりも前の遺物をほとんど含有しない。清須城が本格的に機能して人々が住

み始めたと思われる窖窯後期第4段階以前の遺物がほとんど無いことから、人々がそこに生活を営み初めてから日常用品を入手し、これまで他所で用いた日常用品を持ち込まないことが想定されよう。逆に、相対的に新しい堆積から窖窯末期以降の遺物が連綿と出土することは、人々が継続して定着している場合には古い日常用品も破損などの廃棄される理由がない限り使用（伝世）していたことを思わせる。

6. まとめ

以上、若干の問題点を指摘したのに過ぎず、筆者の力量不足のためか単純な資料紹介に止まるものとなった。今回の90D区は陶磁器のみならず、木製品など多種多様な遺物が出土し、中世世界の内面に深くえぐり込む資料を多量に内包しているのであり、この点については後日まとめてみたい。

なお、最後になりましたが本論をまとめるに当たって、陶磁器の編年観については藤澤良祐氏に全面的にご教示いただきました。また、檜崎彰一氏をはじめ、城ヶ谷和広・尾野善裕の各氏にもご教示いただいた。記して感謝致します。

注

- 1) 鈴木正貴「尾張の城館遺跡出土の陶磁器—16世紀を中心として」『考古学フォーラム1』1990
- 2) 遺構などの詳細な説明は前述。
- 3) 森勇一・鈴木正貴「愛知県清洲城下町遺跡における地震痕の発見とその意義」『活断層研究7』1989
- 4) 瀬戸美濃窯産の陶器の編年については藤澤良祐氏に全面的にご教示いただいた。参考文献は藤澤良祐「“古瀬戸”概説」『美濃陶磁歴史館報Ⅲ』1984と、藤澤良祐「瀬戸大窯の編年的研究」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』1986・井上喜久男「美濃窯の研究(1)十五～十六世紀の陶器生産」『東洋陶磁 第十五・十六号』1988
- 5) 鈴木正貴「第5章 第3節 C期の遺物」『清洲城下町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター1990
- 6) この様な分析は他にも例がある。内堀信雄「岐阜千畳敷出土の瀬戸・美濃陶器」『考古学フォーラム1』1990・注1など。